

肥料と切手よもやま話 (7)

越 野 正 義

リン鉱石資源の耐用年数

19世紀の前半、ヨーロッパでリン酸肥料として使われていたのはもっぱら骨粉だった。イギリス人はワーテルローの戦場の死体まで掘り出していると非難されるほどであった。この骨粉の肥効を高めようと硫酸処理が各地で試みられていたが、工業化に成功したのは1843年のローズ（イギリス）である。彼は1856年にはノルウェーから輸入したリン鉱石を原料として始めたが、それ以降リン酸肥料の原料はほとんどがリン鉱石となった。

リン鉱石は露天掘りと地下採鉱がある。鉱石が表土に近い場合には前者が有利であり、フロリダなどで行われている。はじめは人力、畜力で採掘していたが、次第に機械化が進んで大規模化している。この切手はナウルリン鉱石採掘の今昔を示している。

持続型農業においてはリン鉱石の耐用年数が話題になる。世界のリン鉱石資源について最新のアメリカ地質調査所（USGS, 2002）の推定では、埋蔵量120億t、埋蔵基礎量470億tである（基礎量とは現在の技術では経済的に採掘できない資源）。

この埋蔵量の推定は情報の出所により大きな違いがあるが、同じUSGSでも2年前に比較して大きく増加した。特に中国における埋蔵量は2倍、基礎量は8倍以上に増加した。この基礎資源の採掘技術が進んで可能になると中国は世界第2位、リン酸資源の21%を占めることになる。

埋蔵量が増えたからといって喜んでばかりはられない。現在の生産量で割ると埋蔵量は90年、基礎量は350年ほどで枯渇する。その後どうするのか。リンのリサイクルを高めるしかない。

（財 日本肥糧検定協会 参与）

